

2025年度 こどもの木かげ・玉成幼稚園 自己評価・学校関係者評価（2026年公開）

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かげ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』
（マタイによる福音書5章第13節—14節）

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。

こどもの木かげ（玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園）では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■玉成幼稚園 保育方針

個の生活と集団での生活がバランスよく営まれるように配慮しながら、友だちや周りの人たちに受け入れられていることを意識し、お友だちとの相互交渉を通じて「ともに生きる喜び」を身につけられるように育んでいきます。

保育は、時間と場所の提供であり、子どもの傍らには子どもを励ます保育者がいて、イメージや想像力をたっぷりと与えてあげられる保育の時間と、子どもが自分で遊び、自分で学ぶことができるように工夫された環境の中で保育の流れをつくっていきます。

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とののかかわりをとおした生きる喜びや自己表現が達成」できるように。
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように。
- ③遊びをとおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように。

すべては環境から

安心して生活し、遊ぶ「空間」環境と、優れた遊具や本物・良質な家具や調度品といった「物的」環境、子どもを愛し慈しむ心と自己研鑽を怠らない保育者という「人的」環境、これらが相まって子どもが主体的に学びの物語を紡ぐ、充実した「時間」の環境がつけられていきます。

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】（こどもの木かげ共通）

◆こどもが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とののかかわりを高め、育ちあえているか

遊びを通して、子ども自身が自ら考え、感じ、試行錯誤のできる子ども主体の保育を行った。保育者はすぐに言葉をかけたり、手を貸すことはせず、できるだけ自分自信で考え行動できるように見守った。子ども同士の関わりの中で子どもは自分と他者との違いを知り、たくさんのぶつかり合いや葛藤を通して、悩み考えやがて理解し合い、共に生きることを学んでいきます。認め合い、力を合わせることの楽しさ喜びを味わうまでの道筋を大切に保育を行った。

◆子どもたちに豊かな感性が育つようなとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

子どものありのままの姿を受け止め、まなざしを向け、触れ合うことを大事に心に寄り添う保育を心がけた。整然としているからこそ心地よく過ごす時、雑然としているけど自由感にあふれた場所で安らぐ時、双方に対応した遊びを深められるような環境構成を整えた。特に人は自然の一員ですから、幼児期の一番心が動くときに自然に触れ五感を通して豊かな感性感情が養われるよう、園庭の環境認識を行った。これらの経験から子どもたちは好奇心・探求心を育み、生きる力を身に着けていきます。豊かな保育環境の中で、「やってみよう」「面白そう」などと自ら環境に働きかけていきます。そして様々な学びを繰り返して経験します。子どもたちは自由に仲間と共に楽しみ、自分で考える力、行動する力を養います。愛情深く、自然を大切に、主体性を育む保育を行った。

【重点的にとりくむ課題（今年度の事業計画から）】

◆こどもの木かげの基本理念を踏まえた保育を实践するため職員の資質向上と専門性の向上に取り組む

・各プロジェクト（空間遊具・わらべ歌・食育・運動あそび）における学びの積み重ねは、園全体での共有によって、職員全体のあそびのバリエーションが広がり、保育の充実につながることができた。
・年3回の杉並区の巡回心理相談に加えて応用行動分析に基づいた子ども理解と保育支援の研修を重ねた。個性性が求められる保育の現場で子どもへのより質の高い関わりと保育への取り組みを進めることが出来た。

◆保育実践の記述の学びを継続し、保育を可視化する取り組みを続ける

・ICT化を活用しながら、各園児の連絡帳には写真付きのエピソード、園だよりには各クラスの今を伝えるエピソードを、その日の保育の様子は、ドキュメンテーションとして各クラスの掲示スペース等へと、可視化に努めた。適切な字数の中でいかに伝えるかに腐心した。

◆園の保護者と地域の子育て家庭に向けた子育て支援にとりくむ

・在園児童保護者のニーズが多様であることを踏まえ、より個性性を大切にした支援を心掛けた。連絡帳や送迎時でのやりとりを丁寧に行い、子どもの育ちや子育ての喜びを共有し、面談を通して不安や悩みについて一緒に考えていく等、信頼関係を築くべく努めた。懇談会では保育の様子を動画で説明を加えながら紹介し、保育参加では実際の保育を体験してもらうことで、園生活への理解が深まったと好評であった。

・地域の子育て支援は、すでにある親子ひろばに加えて『保育園の生活体験』を実施、園生活の流れ・遊び・食事に触れる体験から多くの気づきが与えられたと好評だった。ひろば・体験のいずれも保育・栄養・保健の専門職が保護者の相談支援にもあたった。

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと（中長期的視野に立って）

1

野のはな空のとり保育園の保育方針と何を大切にする園であるかをもう一度を職員間で検討を加え絞り込み共通理解したうえでホームページやパンフレットに反映していきたい。職員は自らの表現で園を語り伝えられるようにしていきたい。

2 職員一人ひとりの専門職としての力をさらに育てていきたい。子ども理解、チーム保育の質の向上、保護者支援、インクルーシブ保育、自由保育とは等々の学びを深め、実践につなげていきたい。ボトムアップの流れを育てていきたい。

3 修繕計画（子どもと職員の導線の改善も含め）を立て、施設維持、より良い環境のための必要な対応をすすめていきたい。

4 法人の事業である学校・幼稚園・保育園の連携と支え合いを強め、枠を越えて学生と子どもたちを育て次のステージへと送り出すという使命を果たしたい。

5

地域子育て支援の働きの更なる可能性を探り、コミュニティにおける子どもと家族の居場所という役割を担っていきたい。

◀ こどもの木かげ運営委員会による評価 ▶

1

自己評価の高さを感じる結果となった。「保育の計画性」では③のコメント「全体計画に常に立ち戻り、指導計画他をたて、保育実践に反映させている」とあり、安心感を感じる。同様に「子どもの理解・保育実践とふりかえり」においてはすべてA評価で、長年積み重ねてきた実績があつてのことであろう。「組織の一員として」保育者間の連携と協力もまた、大切な要素であると感じる。

2 今後とりくむ課題

・先生ひとりひとりが共通理解をすることの大切さは勿論だが、園として何を大切にするか、ということの上に、先生それぞれの個性が活きる多様な園であることもまた、時代のニーズである。・近隣には沢山の保育園をあり、それぞれ特徴的な運営をおこなっている。「地域子育て支援の更なる可能性」のひとつとして、広い視野にたつて地域の保育の風通しをよくしていただけるとありがたい。

3 総合所見

規模が小さいメリットもあり、「チーム野のはな」のまとまりと力を感じる。学園としての連携と支え合いの強化が目標のひとつとしてあげられているが、基本の組織が堅固だからこそできることであろう。更に、地域に向けて開かれた園として役割をになっていたことを願う。